

本学蔵東海道関係浮世絵（二）

—日本橋界限—

山下 琢巳

はじめに

「東海道の変遷を日本文学と体験学習を通じてたどる研究」との課題名で、本学の「平成19・20・21年度特別研究費」、および、「平成19・20年度私立大学等経常費補助金特別補助」に採択された。本稿は、その成果報告である。

前稿¹⁾では、イギリス人アーネスト・サトウ（Sir Ernest Mason Satow）の『一外交官の見た明治維新』（*A Diplomat in Japan*, London: Seeley, Service & Co.; Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1921）において、異国人サトウが、幕末の東海道とその旅について、どのような認識を持っていたかを紹介した。そこでは、東海道が江戸と上方を結ぶ幹線道路としてよく整備されていること、また、日本人が大の旅行好きで、本屋の店頭には、多くの旅行案内記や地図が置かれていること、そして、東海道の風物を描いたシリーズものの浮世絵があって、そこには日本人の生活が真に迫る様子で描かれていると記されている。

本稿では、江戸時代から明治にかけての日本橋とその界限の様子を資料によって辿り、それが、本学蔵の日本橋関係の浮世絵では、どのように絵画化されているかを探る。

言語文化コミュニケーション科には、観光・英語・日本文化の三つのコースが設置されている。本研究は、主に「旅と日本文学」という授業で実践しているが、その受講者には、観光と日本文化のみならず英語コースの学生も少なからず含まれる。本稿では、『東京案内』（明治40年・1907・刊）の記述を中心にして、江戸から明治にかけての日本橋界限の様子を押さえるとともに、アンペールの『幕末日本図絵』という欧文資料を扱い、ヨーロッパ人から見た日本橋という視点からも考察を行う。

I 『東京案内』と『東京遊覧案内』

明治元年（1868）7月17日、江戸は東京と改称される。下って、明治21年4月25日に市制・町村制が公布され、東京府の中心部が、麹町区・神田区・日本橋区・京橋区・芝区・麻布区・赤坂区・四谷区・牛込区・小石川区・本郷区・下谷区・浅草区・本所区・深川区の15区に分けられて市政が施行される。そして、その翌年の10月27日、宮城が落成して、東京は帝都として栄えていく。

江戸が東京となり、この新都市の様子を伝えるための観光ガイドブックともいべき小冊子が、明治10年以降、数多く出される²⁾。そのうち、宮城が完成した明治22年（1889）に刊行された『東京土産』（原田眞一編、林平次郎）には、宮城のほかに帝国議会議事堂、新橋停車場、勧業博覧会場、新富座といった近代建築や新しく西欧風に架けかえられた日本橋・吾妻橋が、江戸時代からの名所旧蹟とともに石版画で紹介される。そして、『東京名所』（明治24年）になると、これらの東京見物としての建造物や名所旧蹟が写真として掲載されるよ

うになる³⁾。文明開化の波に乗って大きな変化を遂げていく東京の様子は、それまでの木版刷りから写真入り活版刷りへとメディアの変化をともなって紹介されることとなる。

明治40年、この変動期の東京の見所に加えて、その歴史や文化について記したふたつの書籍が行政機関から刊行される。『東京案内』（官庁版と裳書房出版の民間版がある）と『東京遊覧案内』（博文館）、ともに東京市役所市史編纂掛が編集する。

『東京案内』⁴⁾、菊判2冊、上巻763頁、下巻849頁、写真233図。構成は、総記（東京の地理、過去の東京、現在の東京、都府としての設備）、皇城記（宮城、赤坂離宮、青山離宮、浜離宮、芝離宮、霞関離宮、高輪離宮、麻布御用邸、宮内省）、市街記（東京市15区と近郊）、付録（坪井正五郎執筆の市中及び近郊に存する太古の遺跡）。市街記は、総記、市街、交通、公園附庭園、議院、官庁、公衛、兵營、各国使臣館、法衛、会、倶楽部、学校、図書館附博物館、病院、会議所、銀行、会社、工場、市場、新聞紙、神社、仏寺、教会堂、救済所、劇場、名所、古蹟といった項目に従って記述される。「例言」には、これらを記すにあたって拠ったところにつき次のようにある。

現在の設備に関する記事は、東京府庁、東京市役所、各区役所、其他の資料に拠り、皇城に関する記事は、宮内省の資料其他に基き、官庁、兵營、公衛、学校、病院、団体、社寺、会社、銀行、工場、市場、劇場等の記事は、各自提供の資料、若くは一々吏員を派して調査したる資料に拠る。而も其数の甚多き、内には資料の提供其期を後れ、又は派出調査の暇なくして、他の資料に拠りたるあり。已むを得ずして之を欠きたるあり。故に不備の所少なからざるべきは、編者の切に遺憾とする所也。又旅館、飲食店、貸席、待合、遊船宿、寄席、及芸娼妓等に関する調査は、府下各警察署に依嘱して之をなしたるものに係る。

また、市街の歴史を記すにあたって参照した書については次のように記す。

市街の沿革に関する記事は、東京府誌を初めとして、東京府志料、府内備考、東京市町村沿革表（仁杉英稿）其他に拠る。此外多数の参考書類は、煩を避けて今一々挙げず。

『東京府誌』110巻は、明治8年太政官の命によって東京府が編纂した東京の地誌。構成は、皇城誌、皇城附志、市街誌、村誌、郡誌、島誌と『東京案内』に類似し、文章も類同する箇所が多い。それより先の明治5年に陸軍省が布告を出し、国勢把握のための全国地理図誌のひとつとして編纂されたのが『東京府誌料』120巻。また、『御府内備考』は、江戸幕府官撰の江戸地誌。正編名勝沿革由来145巻、続編社寺由来147巻、附1巻。文政12年（1829）の成立。市街の起立と沿革、社寺、旧跡などについて当時参照し得た地誌類を広く引用し、また幕府が録上させた町方書上や寺社書上を多く利用する。

『東京案内』が、明治末年頃の東京市街を網羅的に記す大部な書であるのに対して、『東京遊覧案内』⁵⁾は、ポケット版ともいべき全312頁の小本で、51図の写真が掲載される。本文は、『東京案内』と類同し、大幅な簡略化がなされている。目次に、「如何に東京に入るべき乎」「如何に東京に宿すべき乎」「如何に東京を観るべき乎」「如何に麴町区（～深川区までの十五区）を観るべき乎」「如何に東京勸業博覧会を観るべき乎」「如何に東京を去るべき乎」

とあり、「例言」に拠れば、明治40年に開催された東京勸業博覧会⁶⁾に上京する人たちのためのガイドブックとして企画された。

本書は明治四十年に於ける東京勸業博覧会の開会を機とし、各地方より上京する人々のため、東京市内及近郊の遊覧に便せむとして編纂したるもの、体裁一に案内を主とす。

大正4年(1915)、初山書店から永井荷風の『日和下駄』(内題に、一名東京散策記)が、出版される。荷風は、「私のでくてく歩きは東京といふ新しい都会の壯観を称美して其の審美的価値を論じやうといふのでもなく、さればとて熱心に江戸なる旧都の古蹟を探り此れが保存を主張しやうといふ訳でもなく、「何といふ事なく蝙蝠傘に日和下駄を曳摺つて行く中、電車通の裏手なぞにたまたま残つてある市区改正以前の旧道に出たり、或は寺の多い山の手の横町の木立を仰ぎ、溝や堀割の上にかけてある名も知れぬ小橋を見る時など、何となく其のさびれ果てた周囲の光景が私の感情に調和して少時我にもあらず立去りがたいやうな心持をさせる。さういふ無用な感慨に打たれるのが何より嬉しい」という。ここには、荷風一流の諧謔が満ちあふれているが、荷風が、近代化の進む東京の中で、江戸情緒を確認するために利用した文献のひとつが、『東京案内』であったといわれる⁷⁾。

江戸時代の地誌について見れば、明暦の大火後の大きく変貌する江戸市中の様子を記した『江戸名所記』7巻7冊(浅井了意著、寛文2年・1662・刊)、また、はじめての実用的な江戸案内書ともいべき『江戸雀』12巻12冊(近行遠通撰、菱川師宣画、延宝5年・1677・刊)以降⁸⁾、江戸の地名、神社仏閣、名所古蹟の沿革や由来を記し、書名に「江戸鹿子」あるいは「江戸砂子」を冠した地誌類が数多く刊行される⁹⁾。そして、それらは、江戸末期、実地調査を取り入れた本文と写実的な挿絵によって構成される『江戸名所図会』(松濤軒斎藤長秋著、長谷川雪旦画、天保5～7年・1834～1836・刊)によって集大成される。

本学に蔵される日本橋界隈を描いた浮世絵には、江戸末期のみならず明治期のものが含まれる。本稿では、『東京案内』の記事を中心に据え、必要に応じて江戸地誌の類を参考にして、浮世絵に描かれた日本橋について探っていく。

II 日本橋

「江戸」という地名についてみれば、「江」とは、「大きな川」であり、「戸」は「入口」あるいは「住居」を意味する。つまり江戸とは河口に開けた都市として命名された。この水と陸地の交叉する江戸のなかにあつて、板東太郎と呼ばれた利根川の河口地帯の西端部に注ぐ平川(現在の神田川および日本橋川)こそは、隅田川と城下町をほぼ直線に結ぶ水運の動脈として最も重要な水路であつた。そして、この平川の河口に架けられた橋のひとつが、日本橋であり、この橋は、一都市である江戸の象徴という範疇を超えて、やがて、日本の中心地として認識されていく。

この日本橋について、『東京案内』には、次のようにある。

区内に於ける橋梁は、市設四十二橋、私設九橋、合計五十一橋にして、其内鉄橋四、鉄混用橋一、石橋四、木橋廿三、土橋十九あり。其重なるものは、第一に日本橋あり。日本橋川に架し、通一丁目より室町一丁目に通ず。慶長八年の創架(慶長見聞集)にして、

日本国中の人聚り掛けたるより諸人一同に日本橋と云ひしとも（慶長見聞集）、諸国の行程此より起るを以て名くとも（府内備考）、旭日東海を出るを望むを以て称すとも（江戸名所図会）、何国の人を問はず江戸に来るもの皆此橋を過るを以て名くとも云ふ（墨水消夏録）。爾来元和四年、万治二年、元禄十三年、正徳二年、宝暦十三年、安永二年、寛政八年、文化三年、文政六年、弘化二年、万延元年、明治五年の架換を経たるもの、即ち今の橋（現に架換の設計中なり）にして、長廿八間幅七間七分の木橋也。（中略）其全国里程の起点となりしも、亦慶長中の事にして、武江年表に、慶長九年二月日本橋を本と定め、東海道及越後陸奥等の諸道に一里塚を築かしめらる、三十六町一里の積りなりとあり。元と橋側に高札ありて種々の掲示をなせり。

慶長9年（1604）2月、幕命により、日本橋は、東海道、中山道、甲州道中、奥州道中、日光道中という基幹道路、すなわち五街道の起点として定められる。日本橋の初架橋については明確な資料がない。しかし、『慶長見聞集』（三浦浄心、慶長19年序）巻2「一里塚つき給ふ事」に「されば日本橋は慶長八癸卯の年、江戸町わりの時節、新敷く出来たる橋也」とあることから、起点と定められた前年には、創架されていたといわれる。

現在の日本橋は、明治44年に竣工されたもので、壁面に花崗岩がめぐらされ、橋梁の様式は、ルネッサンス式と称される。関東大震災の火災、太平洋戦争の戦火にも焼け落ちることなく、当時の姿を今に伝える。日本橋は、はじめて架橋されてから現在にいたるまで、焼失や朽廃によって何度も架けかえが行われた。以下、創架以来の架けかえと焼失を年代順に記すと次のようである¹⁰⁾。

- ・慶長8年（1603） 創架
- ・元和4年（1618） 架換
- ・明暦3年（1657） 1月焼失、万治2年（1659）新架
- ・天和2年（1682） 12月焼失
- ・元禄11年（1698） 12月焼失、同13年新架
- ・正徳元年（1711） 12月半焼、同2年新架
- ・正徳6年（1716） 1月焼失
- ・延享5年（1748） 1月修復
- ・宝暦13年（1762） 新架
- ・明和9年（1772） 2月焼失、安永2年（1773）新架
- ・寛政8年（1796） 新架
- ・文化3年（1806） 3月焼失、同年新架
- ・文政12年（1829） 3月焼失
- ・弘化3年（1846） 1月焼失
- ・安政5年（1858） 11月焼失、同6年3月新架
- ・万延元年（1860） 新架
- ・明治5年（1869） 5月新架
- ・明治44年（1911） 新架

創架以来幕末まで、この日本橋の南詰め西には、常時、幕府の重要な政策などが記された七、八枚の高札を掲げた高札場があった。江戸の大高札場には、日本橋のほかに、常磐門外、筋違橋門内、浅草橋門内、麴町半蔵門外、芝車町の六カ所があったが、最も重視されたのが、日本橋である。『江戸名所図会』所載の挿絵について見ると、石垣の上に格子をめぐらした中に屋根つきの掲示板が描かれている。

日本橋を描く明治以前の浮世絵には、この高札場が、まま描かれる。そして、この高札場のほかに、同じ画面に、江戸城、富士山、大名行列が、描かれることも多い。

江戸という町の中心であり、東海道の起点であった日本橋の橋上からは、かつて日本を治める徳川將軍の居城である江戸城と日本の象徴ともいえる富士山を望むことができた。寛文2年（1662）刊行の『江戸名所記』は、橋上からの眺めを次のように記す。

橋のうへよりみれば、四方晴て景面白し。北に浅草・東えい山みゆ。南にふじの山峨々とそびえ、嶺は雲まにさし入て、鹿の子まだらに降つむ雪までのこりなくみゆ。西の方は御城なり。東には海づらちかく行かふ舟もさだかにみえわたれり

しかしながら、『江戸名所記』「日本橋」の挿絵には、橋を渡る武家行列、橋のたもとの高札、対岸の魚売りなどが描かれるが、江戸城、富士山は描かれていない。日本橋に江戸城と富士山、さらに武家行列を添える図像の初出は、明和5年（1768）刊の鈴木春信の『絵本続江戸土産』中の「日本橋の風景」であるとされる¹¹⁾。また、同様の図像は、同じ春信絵本で同年刊の『絵本春の友』下巻にも見いだせると指摘されおり、富士山と江戸城が日本橋の背景として定着するのは文化年間（1804～）以降で、広重の浮世絵の大半は、この定型を踏まえるとされる¹²⁾。

四季が移り変わり、その時々に変化する江戸にあって、日々、富士山が望めたわけではなかった。しかし、浮世絵に於いては、日本橋に、江戸城と富士山を描くという図像が定着化していく。そして、こういったいわば公としての象徴にくわえて、日本橋図像に彩りを添えるのが、魚売りである。

Ⅲ 魚市場

日本橋の北側、本船町から按針町、長浜町、室町、本小田原町にかけての日本橋川に沿った付近一帯には、魚市場があった。その濫觴は、家康江戸入部後まもなくして、関西から移住し佃島を拠点とした漁師が、許可を得て獲った魚を將軍や諸大名に調達し、その残りを本船町辺で売り出したことといわれる¹³⁾。その後、元和2年（1616）、やはり関西の大和桜井からきた助五郎が、漁師と契約して浦々の生け簀に魚を囲い、幕府や武家の大量買い付けに応ずる方法をあみ出す。このことにより助五郎は、東海・関東一帯の漁場の仕入・販売の実権を得、本小田原町の河岸に魚会所が設けられた。その後、人口増にともなう需要の増加によって、寛文5年（1665）には本船町、天和3年（1683）には按針町の魚問屋が、それぞれ魚市を立てることが許可される。これによって、本小田原町組・本船町組・本船町横店組・按針町組の四組問屋が組織されることとなった。一方、延宝2年（1674）に、武蔵・相模十三カ村、つまり以前より関東在住していた者が、日本橋魚問屋の独占的集荷に対して訴訟を起こし、本材木町に新場を開くことが許可される。

上記の江戸時代および明治維新後の魚河岸について、『東京案内』は、次のように記す。

府下第一の魚市場にして、本船町、按針町、長浜町、室町、本小田原町及魚河岸を其区域とす。起立年月は詳かならざれども、日本橋に市ありたること慶長見聞集之を記せば、其古きこと知るべし。当時今の如く専ら魚介のみを鬻ぎたるや否やは明かならず。佃島の旧記に拠れば、徳川氏開国の初め摂州西成郡佃村の名主森孫右衛門、佃、大和二村の漁人三十余名を率ゐて来り住し、官に請ひて所在の河海に漁し獲る所の幾分を供進すると共に、其余は之を府下に売售せしが、慶長中に至り、子九右衛門市場は日本橋河岸小田原町に開くと、尋で元和の初に及び、和州桜井の人大和屋助五郎なるもの来り住し、是より愈其事を推拡し、遂に漁人商人相分るるに至る。其頃魚問屋の組合四個ありて、四組問屋と云ひしが、延宝中本材木町に新場を開き、寛政年間魚納屋の設立を見、以て幕末に至れり。

維新後は、明治十年六月魚鳥市場例規并税則の制定となり、規定して

魚鳥市場は近国の海川漁場より府下に漕運する魚、貝、塩、干魚、鳥、川魚等を販売するの市場にして、日本橋、新場、芝金杉、千住の四所に於て之を開設するを許し、他の地に於て開場することを禁ず。

日本橋（本小田原町、本船町、元四日市、按針町、長浜町）

新場（本材木町）

芝金杉（本芝二丁目、芝浜松町一丁目）

千住（中組）

と云へり。此時各市場は、魚鳥を販売輸送する問屋、仲買共、夫々組合を結び、会所を立て頭取を置くこととなり、廿四年規約を作り、三十九年改正し、以て現時に至る。現時は組合を芝河岸組、中河岸組、地引河岸組、二十軒組、下河岸組、本小田原町組、按針町組、長浜組、室町組、川魚組、三所組の十一組とし、九百名の組合員、七百軒の間屋、二百名の仲買人を有し、事務所を本船町十八番地に置き、頭取一名、副頭取一名、取締役二名、名誉職に組長十一名、議員三十七名を設け、以て其事務を掌理しつつあり。市場は一万九千坪の地を以て之に充て、毎朝午前四時より正午十二時までの間開場し、相模、伊豆、上総、安房、其他諸国より聚る魚類の売買をなす。明治三十九年の売上高の如き約一千万円に及ぶ。其盛況想ふべき也。現時の頭取を白沢武平とす。

鎌倉を生て出けん初鰹魚

松尾芭蕉

魚問屋には、問屋権が保証され、冥加金の献納も免除されていた。しかし、その成立以来、幕府の善所に、市価をはるかに下回る廉価で魚を納入しなければならなかった。寛政4年（1792）、幕府は、善所の出張機関「魚納役所」を設置して、魚納事務の拡大強化を計り、「納屋」（善所で納魚を扱う部署）への納魚を強制した。

この納魚制度に関連して、江戸時代後期の文化12年（1815）に「建継騒動」、天保5年（1834）に「貫三事件」、そして幕末の文久3年（1863）に「子年騒動」が起きている。これらの騒動は、幕府や諸大名への納魚を取り仕切る御納屋役人、つまり公儀の役人の不正に対して、魚河岸の庶民が反抗した事件であった。このうち「子年騒動」に関わった相模屋武兵衛は、竹を割ったような性格で、背中一面に刺青をした江戸庶民好みの侠客風な男であった。

浮世絵は、公的な支援を受けることなく、庶民の愛玩物として発展した。日本橋を描く浮世絵のいくつかには、粋で気っ風の良い江戸庶民の象徴としての魚売りの姿を見いだすことができる。

IV アンベールの見た日本橋

1868年（慶応4年）8月19日、アーネスト・サトウは、明治改元という歴史的タームが迫る時期（9月16日に改元）に、高輪の伊皿子長応寺（当時オランダ公使館）前に借りていた日本家屋から日本橋に向かい、完成して間もない築地ホテル館へ出向いた。サトウの『一外交官の見た明治維新』に於いて、日本橋に関する記述が見られるのは、この箇所のみである¹⁴⁾。なお、築地ホテル館は、築地鉄砲州の幕府海軍操練所の跡地に設けられた外国人居留地に建設された。幕府作事方の設計、二代目清水喜助（現清水建設の祖）の施工による日本最初の西洋風ホテル兼貿易所であった。外国人からは「Edo-Hotel」と呼ばれ親しまれたが、明治5年2月に焼失した。

私は十九日に、諸道の里程測定の起点である江戸市の中心日本橋まで歩いて行って、そこからさらに、居留地に建てられた宏壮なホテルへ行った。このホテルは、徳川政府が管理して外国人を宿泊させるために造られたものだった。この辺の商業地域は大いに活況を呈していた。往来は特に官軍の侍で雑沓していたが、それに反して、城下の大名屋敷のあたりへ行くと、死の町も同然のさびしさだった。

On the 19th I walked as far as the Nihon-bashi, the bridge in the centre of the city from which all distances were measured by road, and from there to the huge hotel at the foreign settlement constructed under the supervision of the Tokugawa government for the accommodation of foreigners. The commercial quarter was very lively, the streets were crowded, especially by *samurai* belonging to the imperialist forces, but the neighbourhood of the *daimios' yashikis* below the castle was like a city of the dead.

サトウが通訳生としての任務をおびイギリスを出発して横浜に到着した翌年の1863年（文久2年）4月9日、日本との貿易を求めるスイス使節団の一行が長崎に到着する。その首席全権は、エメエ・アンベール（Aimé Humbert, 1819～1900）。肩書きは、「スイス時計業組合（Union Horlogère）会長、参議院議員（Ständerat）」。アンベールは、修好通商条約が調印されたあと、1864年2月17日に日本を去る。この一年に満たない日本滞在中、アンベールは、日本の風景や風俗に魅了される。滞在中の余暇に日本の実情を調査したアンベールは、帰国後、その見聞記を“*La Japon*”と題して雑誌『世界一周（*Le Tour du Monde*）』に連載する。そして、これに増補が加えられ、1870年にパリ、アンシェット社（Hachette）から『幕末日本図絵（*Le Japon Illustré*）』と題した日本紹介の本が出版される¹⁵⁾。上巻424頁図版248枚、下巻432頁図版227枚の革装の大型本。題名の直訳は、「絵による日本」。題名が示すように、この書には、アンベールが収集した幕末日本の浮世絵や現地撮影の日本写真、さらにワーグマン（Wirgman）やアルフレッド・ルッサン（Alfred Roussin）といった画家の素描を細密画に描き直した挿絵が多数所載される¹⁶⁾。

アンペールは、序文で、日本を知るために、ケンペル¹⁷⁾ やシーボルト¹⁸⁾ の調査研究成果を参考にしたこと、しかしながら、日本を知るうえで最も役に立ったのは、本屋に置いてある墨で描いた写生画や色刷りの版画であったと述べている。日本の絵画をまず拠り所にして、日本の制度、習慣、風俗などを調査したという本書の記述をたどることは、また、現代の我々にとっては、浮世絵を逆照射してくれる貴重な遺産であろう。

この書の第5部「江戸—外城の東部付近」(YÉDO LES ARRONDISSEMENTS DE L'EST, DANS LE SOTO-SIRO) 第29章「町人街」(LA CITÉ BOURGEOISE) および第32章「江戸の橋」(LA PONTS DE YÉDO) から、これまでの考察と関連する記述をあげる¹⁹⁾。

江戸および日本の中心

日本橋地区は都の中心となっていて、四キロメートル平方の広さに、五本の南北路、二十二本の東西路を持っている。これらはたがいに直角に交わり、たがいにほとんど同一の七十八の正方形の住居区画を形づくっている。それゆえ全体的にみると、細長い平行四辺形の形をしている。航行可能な運河が四方からこれを取り巻いている。江戸城の外堀に架けられた西方の橋が二本、東方に五本、南方に五本、北方に三本、合計十五本の橋が隣接の町とこの区とを結び付けている。

この北方の三本の橋のうち、真中に架けられている橋が日本あるいは日本橋であり、町名はこれに拠っている。この橋が日本の地理的中心と定められ、帝国のすべての里程はここから測定される。それはあたかもイギリスにおいて、ロンドン橋のマイルストーン Milestone から距離の測定が行なわれるのと同様である。東海道も日本橋で終わっている。

L'arrondissement du Nippon-bassi, qui est le coeur de la Cité, contient, sur une étendue de quatre kilomètres carrés, cinq rues longitudinales et vingt-deux rues transversales, se coupant à angles droits et formant soixante-dix-huit carrés de maisons, presque complètement identiques les uns aux autres. Pris dans son ensemble, il présente donc la figure d'un paralléogramme allongé. Des canaux navigables l'entourent des quatre côtés. Quinze ponts le mettent en communication avec les quartiers adjacents : deux à l'Ouest, jetés sur le grand fossé du Castel, cinq à l'Est, cinq au Sud, et trois au Nord.

Parmi ces derniers, celui du milieu est le pont du Nippon, le Nihon ou Nippon-bassi, qui donne son nom au quartier. On en a fait le centre géométrique du Japon : c'est de là que l'on mesure toutes les distances géographiques de l'Empire, comme cela se pratique en Angleterre depuis le Milestone du pont de Londres. C'est aussi au pont du Nippon qu'aboutit le Tokaido.

魚市場

われわれは今、大きな魚市場の付近に来ている。運河は漁船でいっぱいである。新鮮な海魚や川魚が水揚げされている。北極からの潮流に乗って来る魚、黒潮に乗って来る魚、日本の方々の湾で採れる亀や貽貝、不格好な蛸や異様な甲殻類などである。シーボルトはここで、七十種類の魚と蟹と軟体動物、二十六種類の貽貝とその他の貝類とを数

えている。

魚市場は水揚げ場の付近に広く開かれていて、せり売りを買出しに来た魚屋が取り囲んでいる。騒々しい雑踏のまっただ中では、逞しい腕が魚でいっぱい籠を持ち上げては、人足の漆塗りの箱や籠に移しかえている。ときには、群衆は、人足が二人がかりで鼠海豚や、海豚や、鮫を綱で縛って長い丈夫な竹竿に吊し、肩に担いで行くのに道をあけて通してやる。日本人はこれらの動物の肉を煮たり、鯨の脂肉を塩漬けにしたりするのである。

鮫や鯨の卸しや小売りの商人の群れは、日本橋近辺では見逃してはならない光景の一つである。ここで働く人たちの体つきや、服装や、身ぶり、まったく風変りな身なり、あの海の怪物の腹に突き立てる肉切り庖丁の大きさ、こういったものを見てみると、この大都会の消費を満足させるためには人力の誇示や、特に食物にゲテなものを選ぶ必要は大してないように思えてくる。

Nous sommes dans le voisinage d'un grand marché au poisson. Le canal est couvert de barques de pêcheurs. On décharge la marée fraîche et le produit de la pêche des rivières, les poissons des courants océaniques qui descendent du pôle, et ceux du courant équatorial, les tortues et les moules des golfes du Nippon, et les poulpes difformes et les crustacés fantastiques. Siebold a compté sur cette même place soixante-dix espèces différentes de poissons, de crabes, de mollusques, et vingt-six sortes de moules et d'autres coquillages.

Les halles, grossièrement installées près du débarcadère, sont assiégées de pourvoyeurs qui viennent faire leurs provisions dans les ventes à la criée. Du sein de la cohue tumultueuse, des bras vigoureux enlèvent les corbeilles pleines et les versent dans les paniers ou dans les caisses laquées des coulies. De temps en temps la foule s'entr'ouvre pour laisser passer deux coulies chargés d'un marsouin, d'un dauphin ou d'un requin, suspendu par des cordes à une longue et forte tige de bambou, qu'ils portent sur leurs épaules. Les Japonais font bouillir la chair de ces animaux; ils mettent en salaison le lard de la baleine.

Ce n'est pas l'un des moindres fableaux des abords du Nippon-bassi, que le groupe des marchands de requin et de baleine, en gros et en détail.

La stature, la tenue et le geste de ces personnages, la haute fantaisie de leur accoutrement, les dimensions du couperet qu'ils plongent dans les flancs des monstres de la mer, tout semble dire que, pour satisfaire à la consommation de la grande cité, il ne faut rien moins qu'un déploiement prodigieux de forces humaines et l'emploi des ressources alimentaires les plus phénoménales de la nature.

高札場

日本橋の南端には、胸の高さほどの柵があり、その中には幾本か柱が立てられていて、上部の白木の板には掲示が書かれている。その少し先には、花嵩岩の台の上に高い亭が建っていて、印刷された別な掲示物を雨風から守っている。この二つの施設は江戸の公

的揭示、御高札kokôsatsouであり、古い掟だが、現在まだ適用されているものを知らせたり、幕府の日々の政令を布告するために用いられている。

A l'extrémité méridionale du Nippon-bassi, nous rencontrons une barrière à hauteur d'appui entourant des piliers surmontés d'affiches peintes sur des planches de bois blanc, et, un peu plus loin, un pavillon exhaussé sur une plate-forme de granit et abritant d'autres affiches imprimées. Cette double installation constitue le pilier public de Yédo, le kokôsatsou, destiné à l'exposition d'anciennes lois encore en vigueur, aussi bien qu'à la promulgation des ordonnances journalières de la police taikounale.

橋上からの眺め

江戸城の堀から海に放射している運河の中では、日本橋運河を第一に、京橋運河を二番目に重要視しなければならないであろう。この両運河とも商業地区の中心を通っている。

いたって反りの強い日本橋の一番高い所から見ると、江戸の町はもっとも美しい姿で望まれる。

南に向って歩いて行くと、目の前の地平線の上に白いピラミッド型の富士山が現われる。右手には、大君の居城の四角い塔や、庭園や、築山が町を見下ろしている。日本橋運河はこれと同じ方角に向って、江戸城の堀と合流する所まで、兩岸には絹、木綿、米、酒の倉庫がびっしり立ち並んでいる。左手の魚市場の向う側では、通りや大川に達する運河の上に視線が止まる。材木、炭、竹、畳、覆いをした籠、箱、小さな樽、巨大な魚などを運搬する何百隻もの長い船が四方八方に川の上を往来しており、かたや、通りの方はただ人間が行ったり来たりしているだけのようである。しかし時折、馬や、鈴の付いた二本の飾り綱を尻の回りに巻いた黒い水牛が、どちらも荷をいっぱい積んで通って行くのが見られたり、重い荷物を巧みに四、五段に重ねて積んだ荷車が見られたりする。これらの二輪の車は人足が引っ張っているのだが、この車以外の車の音は聞こえてこない。歩道や響のよい橋の上を歩く下駄の音、荷牛の鈴の音と乞食の鈴の音、人足の調子をつけた叫び声と、運河から立ちのぼる定かでない物音、このような騒音がいっしょになって、他の都会には類をみない奇妙な諧調をかもし出している。すべての大都市には独特のうめき声があって、ロンドンでは耳を聳する上潮の轟きであり、江戸では、流れ去る波の囁きである。波が相次いで打ち寄せるように、各世代がつぎからつぎへと通り過ぎて行く。今、私が目の当りに見ている世代は、祖先が彼らに伝えたもっとも貴重なものを運んで通り過ぎ、やがて姿を消して行くようである。信仰の対象、昔の衣服、古い武具、幾世紀も前の法律、これらすべては、現在、西欧風に形成されつつある新しい日本社会にとっては、もはや思い出の品にすぎなくなってしまうであろう。

Dans le nombre des canaux qui rayonnent des fossés du Castel à la mer, il faut mettre au premier rang celui du Nippon-bassi, et en seconde ligne le canal du Kio-bassi, l'un et l'autre au sein de la Cité marchande.

C'est du point culminant du Nippon-bassi, qui est un pont fortement cintré, que Yédo

se présente sous l'aspect le plus pittoresque.

En marchant vers le Sud, on a devant les yeux, à l'horizon, la blanche pyramide du Fousi-yama; sur la droite, la ville est dominée par les terrasses, les parcs et les tours carrées de la résidence du Taikoun. Dans cette même direction et jusqu'à sa jonction avec les fossés du Caste, le canal du Nippon-bassi est bordé, sur ses deux rives, de nombreux entrepôts de soie, de coton, de riz et de saki. A gauche, au delà du marché au poisson, la vue se perd sur les rues et les canaux qui aboutissent à l'Ogawa. Des centaines de longues barques, transportant du bois, du charbon, des cannes de bambou, des nattes, des paniers couverts, des caisses, des tonnelets, des poissons énormes, parcourent en tous sens les voies de navigation, tandis que les rues semblent être exclusivement abandonnées à la circulation du peuple. On distingue, il est vrai, de temps en temps, parmi la foule des piétons, tantôt un convoi de chevaux ou de buffles noirs pesamment chargés, ces derniers décorés autour des cuisses de deux guirlandes de grelots, et tantôt des charrettes supportant quatre ou cinq étages de ballots artistement empilés. Ces véhicules à deux roues sont traînés par des coulies. Aucun autre bruit de voiture ne se fait entendre. Le retentissement des socques de bois sur les trottoirs et sur le pont sonore, les grelots des bêtes de somme et les timbres des quêteurs, les cris cadencés des coulies et les bruits confus qui montent du canal, forment ensemble une harmonie étrange, sans analogie avec la voix d'aucune autre cité. Car toutes les grandes villes ont une plainte qui leur est propre. A Londres, c'est le sourd grondement de la marée montante; à Yédo, c'est le murmure de l'onde qui ruisselle et s'écoul. Comme la vague suit la vague, ainsi se succèdent les générations. Celle que j'ai sous les yeux semble passer et disparaître, emportant avec elle ce que les ancêtres lui ont légué de plus précieux : objets du culte, anciens costumes, vieilles armes, lois séculaires, tout cela ne sera plus qu'un souvenir pour la nouvelle société japonaise qui maintenant se forme à l'école de l'Occident.

V 浮世絵に描かれた風物

日本橋は、東西に流れる平川の上に南北の方向に架かる。東には江戸橋、西には一石橋が架かり、これらの橋の下を物資を積んだ船が頻繁に運行した。日本橋の北東、本船町から本小田原町あたりの平川に沿った一帯には、魚市場があった。珍重されたのは祝儀に使われる鯛や女房を質に入れてでも食べたかったという初鰯。朝夕荷揚げされた新鮮な魚は、棒手振りと呼ばれる魚屋によって台所へもたらされた。一方、日本橋の南詰には、日本橋を五街道の里程起点と定めたこと、そして幕府の全国支配を宣言する高札場があった。なお、日本橋の魚河岸を除く兩岸には、白壁の蔵屋敷や土手蔵が並んでいた。

日本橋から北へは、室町一・二・三丁目、十軒店、本銀町と続き、今川橋を渡って八丁堀を越え神田の乗物町、鍛冶町へ向かう。また、南は、東海道として、通一・二・三・四丁目、中橋、南伝馬町一・二・三丁目と続いて、京橋から銀座方向に向かう。この辺りは、江戸の最も繁華な商業街であった。

このうち、北側の駿河町には、延宝元年（1673）に、伊勢商人三井高利創業の呉服店「越

後屋（現三越本店）」があり、南側の通一丁目には、寛文2年（1662）に、近江長浜の材木商大村彦太郎創業の呉服店「白木屋（1967年に東急日本橋店と改称、1999年1月31日閉店）」があった。さらに、寛保3年（1743）には、伝馬町三丁目に、京都伏見の呉服商「大文字屋（現大丸）」の出店ができる。

浮世絵の日本橋からの眺望には、富士山と並んで、将軍のお膝元であることを示す江戸城が描かれる。近景には、魚河岸や橋下を行き交う船。そして、大きく描かれるのは、大名行列のなかに溶け込む棒手振りをはじめとする庶民の様子。なかには、問屋街に勤める丁稚、さらに大店の女性や親子に焦点を絞るものもあり、そこでは、大名行列の奴は、たんに操り人形として描かれている。

そして、画面にさりげなく描かれるのが犬である。江戸に多いもの、たとえば、「伊勢屋に、稲荷に、犬の糞（頭韻を踏んでいる）」と…。

【注】

- 1) 「本学蔵東海道関係浮世絵（一）—教材としての浮世絵へのイントロダクション—」（『東京成徳短期大学紀要』平成21年3月）
- 2) 朝倉治彦「『東京案内』について」（復刻版『東京案内』解説、明治文献、昭和49年）には、次のような書籍が紹介されている。
 - ①『東京地理小誌』（土方幸勝、雄風舎、明治10～12年）
 - ②『東京市街案内』（飯島有年、明治11年）
 - ③『東京土産』（岡山伴治、博真堂、明治13年）
 - ④『東京独案内』（佐藤頼吉、平野伝吉、明治14年）
 - ⑤『東京案内』（児玉永成、大倉孫兵衛、明治14年）
 - ⑥『東京案内』（小林鉄次郎、明治15年）
 - ⑦『東京案内』（錦栄堂、明治17年）
 - ⑧『東京遊覧記』（原田真一、小林仙鶴堂、明治21年）
 - ⑨『東京著名録』（宮川文次郎、明治22年）
 - ⑩『東京漫遊独案内』（梅亭金鷲、漫遊会、明治23年）
 - ⑪『東京土産』（原田真一、文魁堂、明治23年）
 - ⑫『東都指南車』（佐伯彪、明治23年）
 - ⑬『東京名所独案内』（上田維暁、青木嵩山堂、明治23年）
 - ⑭『東京市中案内大全』（井上円城、哲学書院、明治23年）
- 3) 倉田喜弘「東京見物」（『江戸東京学事典』三省堂、昭和63年）参照。
- 4) 『東京案内』については、注2および朝倉治彦「『東京案内』の諸本1」（『日本古書通信』2004年5月号）参照。
- 5) 『東京遊覧案内』については、注2参照。
- 6) 国内の最初の博覧会は、明治4年に、京都の西本願寺で開催された京都博覧会（京都博覧会社主催）。東京では明治10年に、上野公園で政府主催の第1回内国勸業博覧会が開催された。内国勸業博覧会は以後、明治14年上野、明治23年上野、明治28年京都、明治36年大阪と5回開催された。上野公園では、その後も明治40年に東京勸業博覧会、大正3年に東京大正博覧会、大正11年に平和記念東京博覧会と、東京府主催の大規模な博覧会が続いた。
- 7) 田辺俊建「地理誌としての『日和下駄』—荷風と小石川—」（『国語研究』昭和61年3月、石川県高等学校教育研究会国語部会）参照。
- 8) 水江漣子「初期江戸の案内記」（『江戸町人の研究』三、吉川弘文館、昭和49年所収）参照。

- 9) 主な書として次のようなものがある。
- ①『江戸鹿子』6巻6冊（藤田理兵衛、貞享4年・1687・刊）
 - ②『江戸惣鹿子』7巻7冊（松月堂不角、元禄2年・1689・刊）
 - ③『江戸惣鹿子名所大全』6巻8冊（藤田理兵衛著、菱川師宣画、元禄3年刊）
 - ④『江戸砂子』6巻6冊（菊岡沾涼、享保17年刊）
 - ⑤『続江戸砂子』5巻5冊（菊岡沾涼、享保20年刊）
 - ⑥『江戸惣鹿子名所大全』7巻13冊（奥村玉華子、寛延4年・1751・刊）
 - ⑦『再校江戸砂子』6巻8冊（菊岡沾涼著、丹治庶智補、明和9年・1772・刊）
- 10) 『日本橋区史』（東京市日本橋区役所編纂、大正5年）、および、西山松之助「火災都市江戸の実体」（『江戸町人の研究』第5巻、吉川弘文館、昭和53年）参照。なお、『日本橋区史』の記述には、齟齬が認められる。
- 11) 鈴木重三「浮世絵の日本橋」（『日本橋駿河町由来記』駿河不動産、昭和42年所収）、同「日本橋浮世絵展望」（『日本橋』展図録、リッカー美術館、昭和58年所載）。
- 12) 大久保純一『広重と浮世絵風景画』（東京大学出版会、平成19年）。
- 13) 日本橋魚市場については、『日本橋魚市場沿革紀要』（日本橋魚会、明治22年）、および、『日本橋魚河岸物語』（尾村幸三郎、青蛙房、昭和59年）参照。
- 14) 邦訳は、『一外交官の見た明治維新』上下（坂田精一訳、岩波書店、昭和35年）による。英文は、2007年Stone Bridge Press 発行 *A Diplomat in Japan: The Inner History of the Critical Years in the Evolution of Japan When the Ports Were Opened and the Monarchy Restored* の本文による。なお、サトウの日記には、同日のことが次のように記されている（『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』7、萩原延壽、朝日新聞社、平成12年の訳文による）。
- 8月19日（陰暦7月2日）歩いて日本橋まで出かけてみる。町にはひとが沢山出ているが、とくに官軍の兵士が多い。まだあたらしい法律は貼り出されていない。見かけるのは上野にたてこもった浪人（彰義隊）を咎める布告だけである。それからホテル（築地ホテル館）へ行く。まだ内部は非常に雑然としていて、未完成の状態にある。しかし、茶屋を配した庭園はうつくしく仕上がっている。すでに数名の外国人が宿泊しているようである。砲艦スナップ号のゴードンと、第十連隊のヘッドとブレイクのために、豪勢な宴席が用意してあったが、かれらが王子へ出かけてしまったので、わたしがそれをひとりじめにした。芸者のうち、ダイキチは背が低く、色が浅黒く、ちょっと魅力があった。カラツは背が高く、ほっそりしたからだつきで、首が長く、多少気取っていた。コチョウはみにくい年増であった。太鼓持ちがひとりきたが、これはじつに愉快な男であった。
- 15) 邦訳に『アンペール幕末日本図絵上・下』新異国叢書14・15（高橋邦太郎訳、雄松堂出版、昭和45年）がある。なお、ロシア語版の抄訳に『幕末日本—異邦人の絵と記録に見る』（茂森唯士訳、東都書房、昭和41年、後、『絵で見る幕末日本』と題して、講談社学術文庫、平成16年から再版）があり、フランス語版の抄訳に『続・絵で見る幕末日本』（高橋邦太郎訳、講談社学術文庫、平成18年）がある。
- 16) 細密画を描くのは、『世界一周』誌所属の画家たち。それぞれの絵には、画家のサインが入る。
- 17) ケンペル（Engelbert Kaempfer）の『日本誌』（原名“*Geschichte und beschreibung von Japan*”）。ケンペルの死後11年後の1727年に、ヨーハン・カスパー・シヨイヒツァー（Johann Gaspar Scheuchzer）による英訳本がはじめて“*The History of Japan*”と題してロンドンで出版されベストセラーとなる。
- 18) シーボルト（P. F. von Siebold）の『日本』（“*Nippon*” 1832-1882）。
- 19) 邦訳は、新異国叢書本により、原文は、初版本による。



①歌川広重〈初代〉
 「東海道五拾三次之内・日本橋・行列振出」
 判型 大判横
 落款 「広重画」
 版元 (竹内孫八)
 改印 「極」(天保年間?)



②歌川国芳
 「東海道五十三対・日本橋」
 判型 大判堅
 落款 「一勇斎国芳画」
 彫師 「彫工房次郎」
 版元 「伊場仙板」(伊場屋仙三郎)
 改印 「村」(弘化年間・1844～48)
 ※「手遊ひもふり出す槍のにほんはし
 なまこえりさへ見ゆる魚市 梅屋」



③歌川豊国〈三代〉

「東海道五十三次の内・日本橋・松魚売」

判型 大判豎

落款 「豊国画」

彫師 「彫竹」(横川竹次郎)

摺師 「摺大久」(大海屋久太郎)

版元 「辻岡屋」(辻岡屋文助)

改印 「福」「村松」「子閨」(嘉永5年・1852・閏2月)

※棒手振りは、三代目板東三津五郎



④歌川広重〈初代〉・歌川豊国〈三代〉

「東都高名会席尽・翁屋・江戸橋・日本橋・式三番之内翁」

落款 「広重」「豊国画」

彫師 「彫巳の」

版元 「通油町ふじ慶」(藤岡屋慶次郎)

改印 「松村」「福」「子十」(嘉永5年・1852・10月)

※翁は十二代目市村羽左衛門



⑤歌川重宣

「東海道五十三次・日本橋」

判型 四つ切り横

落款 「重宣画」

版元 「山甚板」(山城屋甚兵衛)

改印 「改」「寅二」(安政元年・1854・2月)



⑥歌川広重〈初代〉・歌川豊国〈三代〉

「雙筆五十三次・日本橋」

判型 大判縦

落款 「広重筆」「豊国画」

彫師 「彫竹」

版元 「丸久」(丸屋久四郎)

改印 「改」「寅七」(安政元年・1854・7月)



⑦歌川国貞〈二代〉

「末広五十三次・日本橋」

判型 大判豎

落款 「国貞筆（年玉印）」

版元 「きん」（山村金三郎）トリミング

改印 「閏五改」（慶応元年・1865・閏5月）トリミング



⑧歌川国輝〈二代〉

「東京府名所之内・日本橋南呉服橋之景」

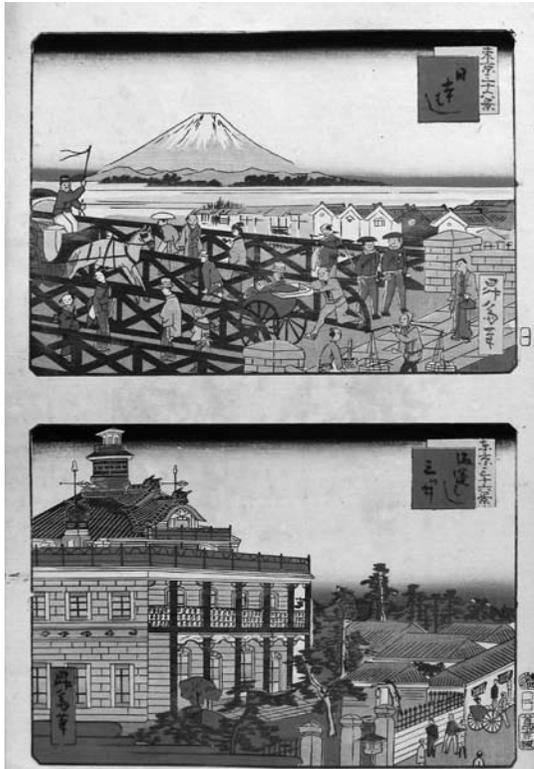
落款 「一曜斎国輝筆」

彫師 「彫長」

版元 「两国太平板」（山村金三郎）

改印 「辰十改」（明治元年・1868・10月）

※「10月13日、快晴。今日、御鳳輦東京に着き給ふ。今朝品川駅を發し給ひ、京橋通りより通り町筋、通り壱丁目二丁目の間より西へ呉服町通り、呉服橋を渡らせられ、未刻頃西城へ着き給ふ。貴賤老稚道路に輻輳して押し奉る。更に寸地を漏らさず、錐を立つべき所もなかりし。御行列の次第は梓に上せて行はるるものあれば、ここに誌さず」（『武江年表』）



⑨昇齋一景

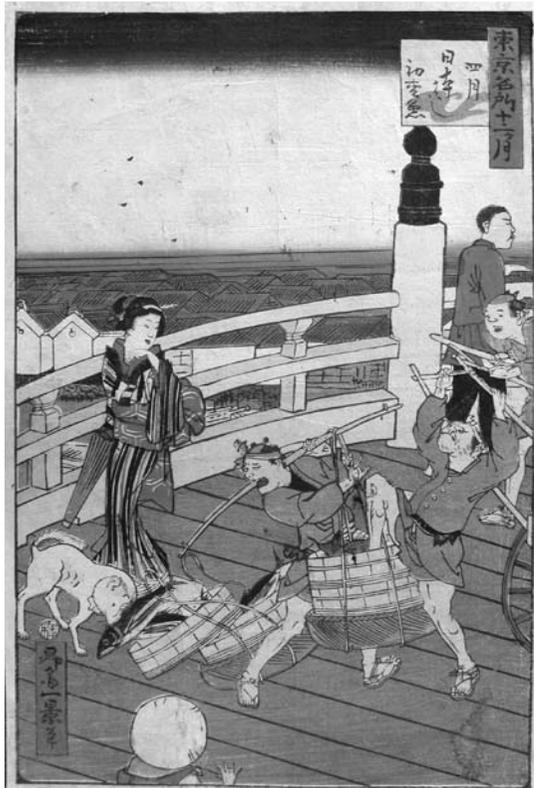
「東京四十八景・日本はし／海運はし三ツ井」

判型 大判縦

落款 「昇齋筆」

版元 「蔦吉板」(蔦屋吉蔵)

改印 「未五改」(明治4年・1871・5月)



⑩昇齋一景

「東京名所十二ヶ月・四月・日本はし・初松魚」

判型 大判縦

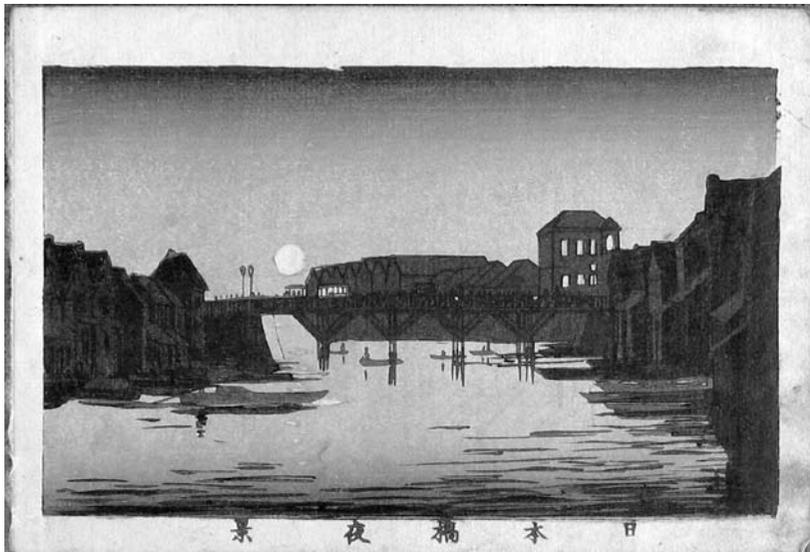
落款 「昇齋一景筆」

版元 「蔦吉板」(蔦屋吉蔵)

改印 「壬申十」(明治5年・1872・10月)



⑪歌川国輝〈二代〉
「東京名勝之内・日本橋」
判型 大判横
落款 「曜昇国輝摸」
版元 「両国加賀吉版」(加賀屋吉兵衛)
※明治7年(1874)カ



⑫井上安治
「日本橋夜景」
判型 四つ切り横
※「東京真画名所図解」(明治17～22年・1884～89)のうち